

【随筆】

ある「ガイジン」のはなし

劉 昊

1. はじめに

「ずいぶん遠くまで来たなあ」と振り返ることがよくある。中国から日本に来て今年で 27 年目になるが、「外国人」としての葛藤を常に心に持ち続けてきたというのが正直なおもいである。

ハーヴェイがかつて「時間と空間の圧縮」といったように、私たちにとってグローバリゼーションは避けられない現象になっている。そしてグローバリゼーションによって、日本社会の多文化化も確実に進んでいる。こうしたなか、多文化共生が盛んに叫ばれるようになり、自治体や民間レベルでもそれを推し進めるための取り組みがなされている。しかし、3F (Food, Fashion, Festival) に代表される表面的な「国際交流」や「異文化理解」に注目が集まる一方で、多くの人にとって日本で暮らす外国人の日常に接近する機会はあまりない。そこで、1 人でも多くの人に日本で生きる外国人のリアリティに触れてほしいと考え、本稿では私の経験を提示したい。もちろん、在日外国人全てに私の経験を重ね合わせるつもりはない。あくまでも、日本という「異国」で過去と今を生き、そして未来を生きようとする 1 人の「外国人」のリアルを感じてもらえればと思う。

なお、本稿は、2017 年に早稲田大学に提出した博士論文「在日中国人ニューカマーと教

育」、及び 2018 年に日中社会学会の学会誌である『日中社会学』第 26 号に掲載された「在日中国人ニューカマーとしての『私』の成長物語」の一部を再編したものである。これらと同じように、学術的な文章として投稿することも可能だったのだが、本稿をあえて随筆という形にしたのは、私がこれまで何を経験し感じてきたのかを「研究者ではない私」の視点、換言すればアカデミックな世界の外から語ることに意義を感じたからである。

また、本号は、慶松勝太郎先生の退任特集号でもあるが、このような個人的な随筆を本号に投稿しようと考えたもう 1 つの理由が実はここにある。慶松先生のご専門は経営学であり、本来ならば経営学における先生のご功績を称えるべきだろう。しかし、経営学に関して門外漢である私にとって、それは叶わぬことである。では、退任される慶松先生を送り出すにあたって、私に何ができるのだろうか。そう考えた時、慶松先生が大学院時代に中国人留学生の支援をしていたというエピソードを思い出した。そして、「外国人である私」の経験を「外国人に関わってきた慶松先生」に読んでいただくことが私の役目ではないかと考えた。少し強引な論理かもしれないが、本稿が LEC 会計大学院を退任される慶松先生にとって、はなむけになれば幸いである。

ある「ガイジン」のはなし

2. 初めての日本

1993年6月、両親の袖を掴みながら、初めて日本に降り立った日のことは鮮明に覚えている。きれいな街並み、整然と並ぶ戸建ての家、見たこともないロボットを置いている玩具店。当時まだ8歳だった私には何もかもが新鮮で、キラキラと輝く別世界に思えた。

毎日、どこかのチャンネルで放送される抗日戦争のドラマ。共産党がいかにも日本軍と戦って勝利したかを教える学校の先生。これが来日前の日常だった。そんな環境にいた私も、「反日的」になるのは必然だった。そのため、来日当初は帰国したくてたまらなかった。それでも、言葉も分からないうちに日本の学校に放り込まれ、友達や先生と深く結ばれるにつれて、日本での生活に心躍らせるようになっていった。しかし、後述するような様々な体験によって、異国で生きる過酷さを知ることになる。

3. 両親の苦勞

私が育った広島県福山市では、中国人の多くが自分の商売を夢みている。もちろん、夢が叶うのは、ごく一部である。しかし、成功した同胞に羨望の眼差しを送り、「いつか自分も」とみんな考えている。外国人が異国で展開するビジネスは一般的にエスニック・ビジネスと呼ばれる。エスニック・ビジネスは、各エスニック集団の得意分野を活かしたものになることが多い。中国人に関して言えば、中華料理店を経営するのが、ある意味お約束となっている。福山市でもそれが顕著である。中国人向けの便利屋を経営する者もいるが、やはり商売といえば中華料理店がほとんどを占める。私の両親も例外ではない。日本での定住を決めてから、自分の店を持つことを目

標に頑張った。そのかいあって、2006年に自分の店をかまえることができた。しかし、そこまでの道のりは平坦なものではなかった。

父は、日本語学校で学んだ後、大阪の中華料理店で調理師として雇われていた。当時の生活は苦しく、戸建ての家に中国人仲間と10人ほどで住んでいたという。収入自体が少ないこともあるが、そのほとんどを私たち家族に送金していたためだった。そんな生活が何年か続いた後、私と母の来日によって、大阪から広島へと移ることになる。私たち家族の物語の始まりであった。

両親は必死に働いた。2人とも同じ中華料理店に勤め、帰宅は毎日遅かった。しかし、収入は少なく家族3人食べていくのがやっとだった。周りの子どもたちは、新しいゲーム機や玩具をすぐにもらえる。いろんな所へ遊びに連れて行ってもらえる。それがとても羨ましかった。たまにもらえる1,000円にも満たない飛行機の玩具や、怪獣のカードがたまらなく嬉しかった。また、両親は休みが週に1日しかなく、それも平日だった。そのため、学校帰りに商店街に出かけるくらいしか、家族での外出はなかった。当時は車もなく、自転車で移動していたのが今ではとても懐かしい。

両親の職場での環境はとても厳しそうだった。同じ職場の同僚に激しい嫌がらせを受け、父はノイローゼ手前まで追いつめられた。母も日本語ができなかったために、人が嫌がるような仕事ばかり押しつけられた。初めて両親の職場に行った時のことは記憶に深く刻まれている。罵られながら働く2人の姿に心が痛んだ。数年後、店のオーナーが父を店長にしたいという話が持ち上がった。しかし、ここでも、同僚の根も葉もない告げ口でせつかくのチャンスが台無しになった。夢が叶うと思った父にとって、大きな衝撃だった。

その後まもなく、勤務先の中華料理店が倒

ある「ガイジン」のはなし

産したため、2人とも職場を変えることになった。職場は別々だが、2人は心機一転、新たなスタートを切った。父は良い職場に巡り合ったようで、店で1番信頼される存在になった。一方の母は職場を変わり、またも辛い体験をすることになる。日本人によるいじめが母を待ち受けていたのだった。まかないのかわりに、1人だけ客の残りを食べさせられる。他の従業員が仕事をさぼって談笑しているなか、他の仕事を全てさせられる。ひどい時には、まだ湯気が立っているラーメンを手にかけてくれたという。最初のうちは私のために耐えていたが、1年が過ぎようとした頃、ついに辞めてしまった。それからは、妹が生まれたこともあり、専業主婦として家事に専念した。

父の頑張りもあり、何とか私を地方の国立大学に通わせることができた。それでも、周りの日本人のようにはいかず、奨学金や教育ローンでようやく可能だった。そして、私が大学2年生の時、ついに両親は念願の独立を果たすことができた。とはいえ、店の開店資金はやはり銀行に頼らざるを得なかった。また、店の工事も工場勤めの中国人仲間に手作りで頼んだ。来日当初ほど金銭的に困っていたわけではなかったが、それでも一般的な日本人家庭と同じ水準の生活を送ることは難しかった。

母の支えもあって、店が軌道に乗ってきた頃、父が腰を悪くした。腰椎すべり症という病気らしい。たまの帰省に目にする父の姿。腰に巻かれたコルセット。それでも厨房に立ち続けるその姿に、異国で懸命に奮闘する1人の外国人の姿を見ることができる。

4. 家族を失うことの意味

私には大学生の妹がいる。当時、中国では1人っ子政策がとられていたことに加え、高齢出産だったということもあり、両親にとってはまさに目に入れても痛くない存在だ。妹の誕生は、両親にとって夢が叶ったと言って良い。一方で、私の胸には今も忘れることのない記憶が刻まれている。光を見ることができなかつた1人目の妹だ。

その知らせを受けたのは、中学2年生のある日だった。出産予定日のその日、授業が終わると、私は家まで走った。5階まで続く階段を駆け抜けるのは、運動が苦手だった私にはつらかつた。家に帰ると、父が仕事を早退して既に帰宅していた。しかし、なぜか座ったままで喜ぶ様子もない。「まだ生まれていないのかな。」そんなことを思った。突然のことだった。「あの子はいなくなったんだよ。」声が震えていた。あんなに泣いた父を見たのは最初で最後だった。父と抱き合っただけ泣いた場面が、今でも甦ることがある。

多少落ち着いた後、父と私は病院に向かった。暗い病室に母はいた。その腕の中には、人形のような妹がいた。息はしていない。母は私たちに反応することもなく、顔を妹の体に埋めていた。父は、母に声をかけることができないでいた。私もどう振る舞えば良いのか判断ができなかつた。

次の日には、学校の遠足が控えていた。当時の担任に経緯を話すと、「遠足なんていいから、今はお母さんのそばについててやれ。」と言われた。それから3日ほど学校を休んで、病院に通った。仕事に戻らなければならなかつた父にかわって、私が母の話し相手をした。その間母は、担当の看護師に頼んで毎日妹を病室まで連れて来てもらっていた。母に「抱いてみる?」と何度か聞かれることがあつた。しかし、私にはできなかつた。顔を見ること

ある「ガイジン」のはなし

さえできなかった。なぜあの時抱いてやらなかったのか、なぜ顔を見てやらなかったのかと後悔にかられることがよくある。当時の私には、そこまでの強さがなかったのだろう。

しばらくの間、父は病院に泊まり母の世話をしていた。学校で朝が早かった私は、父と入れ替わりで帰宅した。母が落ち着くまでの間、同じ団地に住む中国人の李さんが、私の食事などの世話をしてくれた。李さんは私が寂しくないよう、何日か泊まり込みで世話をしてくれた。周りに関係の深い日本人がいなかった私たち家族にとって、非常にありがたかった。同胞との繋がりを感じた時でもあった。

1 人目の妹の誕生は、両親だけでなく、きょうだいが欲しかった私にも中国では味わうことのできなかった喜びをもたらしてくれるはずだった。しかし、私たちに突きつけられたのは家族の喪失という現実だった。よくある話で、そんなに珍しいことではないかもしれない。ただ、中国から来た私にとって、この経験は日本人とは違った意味合いを帯びているように思う。祖国では望めない新たな家族。ようやくその夢が叶うと思った時にどん底に突き落とされる。少なくとも私には、「家族の喪失」と「夢の喪失」という二重の悲しみの中に叩き落とされたように感じた。10年以上経った今でも、両親が当時のことを語るのを聞いたことがない。2人が当時のことを乗り越えることができたかどうかはわからないが、生まれ変わりのような妹に両親はあふれんばかりの愛情を注いでいる。

5. 失礼な私

「日本人や。失礼やなあ、あんた。言いつけてやる(笑)」

大学生の時、同級生のAさんに言われた一

言だ。日本に来てから約27年、露骨な差別を受けたことは何度もある。しかし、この言葉ほど胸に深く突き刺さったものはない。ある日の授業の空き時間の出来事だった。当時、中国人留学生の集団の中によく見かける女の子がおり、私は彼女を中国人留学生だと認識していた。ただ、留学生にしては周りに比べて日本語が上手だったため、私と同じように彼女も幼少時に来日したのだと思っていた。そこで、彼女と知り合いだったAさんに聞いたところ、前述の返答をされた。その瞬間、自分の全てを否定されたような気がした。Aさんに悪気があったわけではないが、その言葉にどう反応すれば良いかわからなかった。

「中国人のくせに。」「中国って電気あるの?」。そういった被差別体験は何度もあるが、たいていは相手と喧嘩になった時や、発展途上国に対する偏見から来るものだ。80歳を超えた老人に、誤解から「中国人の泥棒野郎」と罵られたこともある。ただ、これらの場合には言い返すことができる。相手が感情的になっている分、落ち着けば話し合いもできる。

Aさんのケースは全く異なる。彼女に私を傷つけようという意思はおそらくなく、ごく普通の反応だったのだろう。しかし、私にとっては冗談と割り切れることではなかった。そして、彼女のその当たり前の反応がとてつもなく怖かった。

アイデンティティの問題はともかく、表面的な暴言はさほど気にすることではなかった。極端に言えば、出自を異にする者同士の摩擦はある程度しかたないと思えた。しかし、存在そのものを否定されることに関しては、敏感になってしまうものである。ここで紹介した経験でも、無意識に日本人から一方的に「失礼な存在」の烙印を押されたのだ。この「無意識」に最も尊厳を傷つけられる。

ある「ガイジン」のはなし

6. 恩師たちとの出会い

ニューカマー第2世代の教育に関する研究では、(近年は改善されつつあるが)外国人の子どもたちの高校や大学への進学率の低さがよく指摘される。そうしたなか、私は博士課程まで行かせてもらった。それが可能になったのは、小学校で出会った恩師たちによるところが大きい。

来日してから約1ヶ月経った頃、両親から小学校への編入手続きができたことと知らされた。学校に行くこと聞いて、楽しみという感覚はなかった。むしろ、日本語もできない中国人が日本の学校でやっていけるのかという不安の方が大きかった。

学校に編入したばかりの頃、日本語ができずに退屈な日々を過ごしていた。テストの時間はさらに退屈で、座っているだけだった。そのため、学校に行きたくないと思うことも少なくなかった。そんな時、手を差し伸べてくれたのが担任の吉岡先生だった。吉岡先生は「ここ、ここ。」と、テストの答えを指し示してくれた。指示どおりに書くだけの単純作業だったが、「やることがある」時間がとても嬉しかった。日本生活において、吉岡先生をはじめとする恩師との出会いは、私にとって大きな意味をもつが、小学校で出会った2人の先生は特に重要な存在だった。

ある日、校長の山田先生に呼び出され、学校生活について聞かれた。内容はよく覚えていないが、1つだけ鮮明に覚えている。学校には、部活動のトロフィーを飾る場所があり、山田先生は私をそこに連れて行くと、「日本語を覚えたら、好きなものをあげよう。」と話した。今思えば、あり得ない話だが、私はとても嬉しかった。結局、山田先生の定年退職で約束は果たされなかったが、その言葉が私に日本語の上達という目標を与えてくれた。

また、日本語教室の林先生もかけがえのない存在だった。林先生は学校が私のために用意してくれた日本語教師である。林先生の授業は絵カードやおはじきなどゲーム形式が中心だった。私が退屈しないよう、楽しく工夫をしてくれたのだろう。勉強以外にも、誕生日会や中国では一般的ではなかったクリスマス会を開いてくれた。

当時、日本語指導が必要なのは私1人だけだった。そのため、図書室の横に設置された日本語教室には毎日私と林先生の2人しかいなかったが、それがとても心地良かった。学校で禁止されていたお菓子も日本語教室では食べることができた。同級生にいじめられて学校に行きたくない時も、林先生に会えば心が落ち着いた。仕事で両親の帰りが遅い私を心配して、家まで送ってくれることもあった。林先生との思い出には、もう1つ忘れられないものがある。来日当初、初めてみた心靈番組がきっかけで、1人で家に帰れない時期があった。そんなことは誰にも言えなかったが、林先生にだけは甘えることができた。無理を言って林先生に家まで送ってもらったことも少なくなかった。林先生は決まって、「早く1人で帰れるようになると良いね。」と私を送ってくれた。このように、日本語教室は林先生と過ごした思い出が詰まった私の大事な居場所だったが、林先生の引っ越しにより、3年生の終わりにその生活は幕を閉じた。

日本の小学校は、大切な体験や出会いを提供してくれた場所である。高学年ではいじめも体験した。日本語が上達しても自己主張ができずにいた時期もあった。自分が外国人ということで日本の学校では遠慮ばかりしていたこともあった。しかし、そこから這い上がり今の自分があるのは、やはり小学校で出会った恩師たちのおかげだったと思う。

ある「ガイジン」のはなし

7. おわりに

我々は労働力を呼んだが、やって来たのは人間だった。

マックス・フリッシュ

ヨーロッパの移民をめぐって、スイスの作家マックス・フリッシュが1965年に述べた言葉である。本稿では、私の人生において重要な体験をいくつか綴った。私が日本で感じてきたのは、悲しみや苦しみだけではない。それ以上に幸せを手に入れてもいる。私の体験をとおして読者に感じとってほしいのは、外国人も日本人と同様に喜怒哀楽の感情をもつ人間だということである。

日本では今後4,000万人規模の移民を受け入れなければ就労人口を維持できないといわれている。このことを象徴しているのが日系

人ビザや技能実習制度であり、多くの業界で外国人労働者の存在感が大きくなっている。

一方で、日本で外国人といえば、「ガイジン」として位置付けられることが多い。そして、自分たちとは関係のない異質な人々として関わりたがらないこともしばしばある。あるいは、ルールも守れない存在、犯罪を喚起させる存在、社会保障に「タダのり」する存在と認識されることも少なくない。

こうしたイメージは、メディアを通して、嫌でも飛び込んでくる。異質だと思っている存在に対して嫌悪感を抱くのはある程度無理はないと私は思う。しかし、そういう時こそ、本稿のような外国人が日本で紡ぎ出す物語に目を向けてほしい。そうすれば、「ガイジン」たちも、「日本人」と何ら変わりのない1人1人の人間だと気づくだろう。

(参考文献)

ハーヴェイ・デヴィッド. 1999(1989). 『ポストモダニティの条件』. 吉原直樹訳. 青木書店.